

中部の

エネルギーを 築いた

人々

黎明期電気事業のパイオニア・川北栄夫—その2

～北海道から九州まで地方の電力会社を創設～

川北栄夫は、1909(明治42)年、川北電気企業社を大阪市に設立してから、1930(昭和5)年に解散するまでの30年間、全国で約52社の電気事業会社の設立や電気事業に関する投資・設計・監督・工事請負・電気機械器具製造、輸入販売など企業コンサルタント業務に携わった。

今回は、川北が直接、間接的にかかわった記録が残されている代表的な電気事業の事績やエピソードを紹介する。なお、「川北栄夫が興した全国の電力事業」と「川北栄夫の略歴」については2月号を参照されたい。



川北栄夫 (1876～1956)
[写真提供: 川北電気工業(株)]

北海道各地の電気事業

北海道は、広大な山野に集落が点在するため、大正年間、小規模な電気事業会社が設立された。この時期、川北電気企業社は発電設備の諸資器材調達や工事の請負、事業資金の出資などの面で、北海道電力管内にあった22社を積極的にサポートした。

他方、富士電気株式会社(資本金:1,650万円)が富士製紙の自家用発電部門から、1919(大正8)年に分離独立し設立された。

そして同社は、明治43年に設立された釧路電気、大正5年に設立された下富良野電気・名寄電気、大正6年に設立された厚岸電気・美幌電気・網走電気、大正7年に設立された浦幌電気・池田電気・十勝水力電気・湧別電気・紋別電気・空知電力利用組合、大正8年に設立された足寄電気・陸別電気などを1920(大正9)年に吸収合併した。

越後電力株式会社—自動式運転を目指した海川第3発電所

海川は、新潟県西頸城郡にある阿弥陀山から日本海にそそぐ総延長約20^{*}kmの河川である。

越後電力(株)は、1935(大正10)年に資本金100万円で設立され、大正14年に海川の中流に第3発電所(出力:1,587kW)とこれに付帯する送電線路・開閉所などを建設した。

工事は川北電気企業社が請負い、自動式運転を目指したもので、その後の発電所建設工事のモデルとなった。引続き、海川第1(出力:3,470kW)、第2(出力:4,060kW)、第4(出力:660kW)の発電所の建設を計画したが、資金調達が困難になり、1931(昭和6)年に黒部川電力に事業を譲渡し解散した。

黒部川電力株式会社—川北栄夫が設立し、現存する唯一の電力会社

先月号で紹介した黒部川電力は、1923(大正12)年に設立され、1926(大正15)年に黒部川第一発電所(出力:4,160kW)、第二

発電所(出力:3,440kW)を運転開始、続いて、1929(昭和4)年に第三発電所(出力:3,700kW)を建設した。しかし、川北電気企

業社が経営危機に陥り、川北は、日本海電気(株)に全株式の買収方を申し入れた。日本海電気は、北陸地方一社化の線に沿い黒部川電力を傘下にし、新たな陣容で発足した。そして、富山県営合口用水事業に呼応して、相本堰堤の建設とかんがい用水の整備、これを利用した黒部川第四発電所(出力：5,580kW)を1932(昭和7)年に完成した。

他方、1931(昭和6)年に越後電力(株)を吸収合併、1933(昭和8)年に電気化学工業(株)が大所川・子滝川発電所などの電力設備の現物出資により、両社出資比率50%による新資本金を1,800万円に増資し、ここに新たな陣容による黒部川電力がスタートした。そして、姫川第六発電所(26,000kW)を1935(昭和10)年に完工させた。

その後、1939(昭和14)年に日本発送電(株)の設立、1941(昭和16)年に配電統制令が公布、翌年、北陸配電(株)が設立され、国家管理のもとにおかれたが、同社は供給区域がない特殊需要家への電気事業会社として残った。

1951(昭和26)年、電気事業再編成により発送配電一貫経営、独立採算制の九電力会社が設立された。そして、昭和28年に黒部川



新旧の黒部川第二発電所(出典：水力ドットコム)
旧・黒部川第2発電所(左)：黒部川電力が1926(大正15)年に建設
新・黒東第3発電所(右)：北陸電力が1993(平成5)年に再開発

水系6発電所を北陸電力(株)、海川水系4発電所、大所川・小滝川発電所を電気化学工業(株)に分割し、黒部川電力(株)は姫川第六発電所だけを所有し再出資した。1956(昭和31)年に本社を東京に移転し、北陸電力、電気化学工業の協力を得て電源開発を行い、現在発電所5ヶ所、66,900kW(姫川第六・滝上・長杵・笹倉第2・北小谷)を持つ電気卸供給会社である。

このように変革の時代を生き抜き、激動の時代に川北栄夫が創立した企業名が存続する唯一の電力会社である。

初瀬水力電気株式会社—関西水力電気・東邦電力株式会社に吸収合併

1877(明治10)年、奈良県初瀬町の素封家に生まれた的場順一郎は、1909(明治42)年に資本金15万円で初瀬水力電気(株)を設立、川北電気企業社が初瀬水力発電所(出力：200kW)の建設にかかり、翌年、開業した。そして電灯や三輪そうめんの製粉用動力の普

及を図ったが、その後の経営に苦心し、1911(明治44)年に関西水力電気と合併した。また、的場順一郎は、川北栄夫の傘下にある近江水力電気の支配人、関西水力電気の監査役、近江鉄道社長などに就任している。

松江電灯株式会社—北原発電所の建設

松江電灯は、1895(明治28)年に地元実業界が発起人となり設立され、単相交流発電機1台(出力：34kW)でスタート、1902(明治35)年に75kWの発電所を増設した。さらに、需要の増加に伴いライバルの山陰電気(株)が松江市内に進出するのを防ぐため、急遽、水力発電所の建設が計画された。

1911(明治44)年、株主総会において、北原水力発電所開発を議決、新株8,800株を発行(5,000株を川北が引受け)し、資本金を6万円から50万円に増資した。そして、島根県斐伊川に発電所の建設に着手し、翌年、①出力：920kW ②水車：エッシャウイス社製(1,500馬力) ③発電機：シーメンス・シュ

ケルト社製(920kW) ④有効落差：40mの北原発電所を完工させた。

この時、川北栄夫と野口遵が取締役に選任

され経営に参画し、堅調な歩みを続けたが、大正6年に~~出雲電気株~~と合併した。

川北電気企業社のエピソード2題

エピソード① ニューヨーク支店、東京・京橋、大阪・梅田にショールームを開設

川北電気企業社は、1934(大正9)年にニューヨーク支店を開設した。当時、渦巻型扇風機が風靡した時であり、12インチの27,8円に比べて、手軽に買える8インチで10円のベビーファンを輸入して売り出した。同時に、16インチや、首ふり型を工場で発案し製造した。また、日本家庭電化普及会のすすめによって、東京の京橋でアメリカにまねて、美しい娘に揃いの事務服といったいでたちで、ブロードウェイそこのけのショーを開き電化製品の実演をさせた。さらに、大阪の梅田新道交差点に大阪販売店を開き、動力用機械のアフターサービスにあたり、人々を驚かせた。

エピソード② 松本清張の自伝「半生の記」から引用した川北電気企業社

小説家、松本清張は大正12年から3年間川北電気企業社小倉出張所に勤務していた。その内容を「半生の記」の中で

「私が父に伴われて小倉の職業紹介所(職安の前身)の窓口の行ったのは、高等小学校を卒業した年で、大正13年であった。

その頃の世間は不景気の最中だった。紹介所の窓口の係員は私の痩せた蒼い身体つきを見て、会社の給仕の口が一つある、そこに行ってみてはどうか、と言って紹介状を書いてくれた。それが大阪に本社を持つ川北電気株式会社というのだった。…

さて、川北電気株式会社というのは、主に電熱器と扇風機を造っている会社だったが、そのほかモーターも売り出していた。KDKというのがそのマークで、扇風機は業界ではトップレベルではなかったかと思う。扇風機



川北電気企業社小倉出張所

に付いているガードと称する、あの渦巻型の鉄線は、川北電気の新案特許になっていて、そのスマートさから、これだけは日立や明電舎、安川電機などをずっと抜いていた。

小倉出張所は、自社製品の傍ら、地元九州電力軌道株式会社という大きな会社の下請工事でも請負っていた。…」と述懐している。

また、松本清張記念館が生誕の地・北九州市小倉にある。同館発行の「ふるさと小倉清張文学の羽搏き」には、ウインドゥに扇風機が写っている川北電気企業社小倉出張所の写真が掲載されている。(寺沢安正)



半生の記